

対話で深める学びのレッスン

—「ムーンライト・シャドウ」をめぐる冒険—

● 青 木 幸 子

1 はじめに

筆者はこれまで「生徒が他者との対話を通して一つの課題を探求する学び」を意味する「共創」活動を通し、「語り」の共同体を創出する実践を続けてきた。一昨年は、高校二年現代文「山月記」の授業の終わりに、ホット・シーティングというドラマ手法を用いることで、知的理解をこえて、からだで感じ、心の深いところで考える体験を行なう挑戦を試みた。「知識注入型」でなく、また、予定調和的ではない新たな学びの場を創造したいというシンプルな狙いをもって行なった試みを通し、生徒達は思考を深めていく方法として「問い」を発することの重要性について語り始めたのであった。「先生、「こころ」を全部、自分達で問いを出してやっていくのってどうですか?」「ホットシーティングの席に夏目漱石先生が座っているって感じで、みんながいろいろ聞かって感じ、おもしろいよね」「別に漱石先生だけじゃなくって、主人公の先生や、Kがホットシーティングに座っているって思って聞いてもいいよね」等々、「問い」をもとに、授業を展開していきたいという希望が提示された。そこで、生徒から出された「問い」をもとに、教師である筆者は司会者のように、生徒同士の「対話」をつなぐこと、広げることには徹していった。どれが正解であると評価するのではなく、「ここのところは、よくわからないので、もう少し詳しく教えて」「今の聞いて、私も……と思ったけど、どうかな?」等、司会者であると同時に問いを探求するメンバーの一人という立場での授業展開であった。このような授業が終わると決まって、「私はなんだかここのところがスッキリしない」「……ちゃんの言った、〇〇はそうそうって思ったけど、私はここのところが、もやもやする」などとあちこちから声が響き、教壇の前に何人も生徒が集まり対話を繰り広げる。「すっきりしない」という思いが更なる対話を求め、適度なもやもや感が次の学びをドライブするエネルギーとなる、そのような場面に多く出会うようになったのである。授業が終了した後に生徒が「すっきり」という思いを抱くこと、これこそがよい授業だとどこかで思っていた私の固定観念をアンラーン（打ち破る）することとなったのが「問い」を中心にした「対話」を通して答えを探求する授業「こころ」であった。

自分達で見つけた「問い」を中心におき、それぞれが頭の中で「答え」を探しに行く。そのとき、頭の中では深く「考える」状態ができあがる。しかも、一つの「問い」が皆の頭にスイッチをいれ、皆が一緒に考えている。このように、まさに「チーム脳」になっている状態でくり広げられる「対話」においては、「ああ、そうそう、私が言いたかったのは、そう、それ」「ああ、そうか～全然そこに気づかなかったあ」「私は、こういう風に、考えるとどうかなあと思うのですが」等、皆が思ったことを自由に語り、それがあたかもひとつの頭の中で起こっているように、皆が思考を補完しあう状態となっていた。それは、知がめぐり、みなぎ、思ってもいなかった地点に到達していくという、まさに「知的冒険」と呼べるような活動であった。「山月記」を端緒に始まった「こころ」（及び宮澤賢治「永訣の朝」でも行った）での実践は、「問い」が生徒達の思考にスイッチを入れ、それが連鎖して皆の思考がスパークしていく現場に筆者を立ち合わせてくれた。新たな知の生成を目の当たりにしたことは、「学び」に対する筆者自身の考えを大きく

揺らすものともなっていた。

教師である私は、どんなにスリリングでワクワクするような仕掛けを考えても、最後は安全なゴールに生徒を連れて行きたい、そんな思いが自身の中にあっただのではないか？それは、私自身の目指す「学びの場」作りなのだろうか？思い切って生徒と一緒に、もっとゴールの見えない、ひょっとしたらとんでもないところに行ってしまうかもしれない「冒険」のような学びに挑戦してみようというのはどうだろうか？

「問い」というエンジンを使うことで、皆と一緒に考えて、答えを探していくことの楽しさと苦しさ、それが何より学びのモチベーションをあげていることに着目した筆者は、「問い」を立て、まず自分自身で考え、そしてチームで探求する「学びの冒険」プロジェクト構想を考え始めていた、まさにそのころ、あの3・11大地震が発生したのである。社会の状況が激しく変化し、誰かが確実な正解を知っていると思われた時代は終わった。今必要なのは、正解がない時代に、皆で正解と思われるものを探ること、常に化する答えであることを承知しつつも、皆で、答えを探す知的冒険を開始すべきであり、それがほかならぬ「今」であることを再認識した筆者は、改めて「問い」を中心に据えた「対話」による実践を開始したのである。

本研究では、筆者の試みた「学びの冒険」プロジェクトの一つとして、「七夕読書会」における小説「ムーンライト・シャドウ」をめぐる知的冒険の試みを紹介したい。

2 研究実践

2-1 七夕読書会実践の契機

「問い」をたてて「対話」を繰り広げる、生徒達は既に高校二年次の授業の中で、仲間の語りに一生懸命耳を傾けると、自己と他者の考えの違いに気づいたり、自己の考えが深まったりする、学びの楽しさに魅了されていった。自身を振り返ることは次の「良質な問い」を生み、それがゆるやかなつながりを構築していく。「一緒に考えると、一人で考えるよりももっといいアイデアが生まれるし、なんととっても、みんなとつながってる感じがする」そのように語る生徒達は、「問い」「対話」による「つながり」の中で、新たなひらめきが生まれることを体験していた。同時に、皆がチームで思考することで、モチベーションが上がり、主体的に取り組み、そこで何らかの成果をみつけたときに満足感がアップし、加えてチームで取り組むことの楽しさを実感できるという好循環が生まれることも認識しつつあった。

筆者が担当する高校三年「現代文」は、「ちくま評論選」という難解な現代思想のエッセンスを集めた評論読解を中心とするものである。そこで、「生徒の思考にゆさぶりをかけ」「学びの場を生み出す」つまり「学びの冒険」を実践することは存外難しいかもしれないと考えた筆者は、ステップ・バイ・ステップと称し、まずは、身近で適切なテーマを生徒各自に探求させる小さな冒険からスタートすることに決めた。

まずは、チームで考える知的冒険の第一歩として「傾聴」姿勢をつくることを目標に、「私の話を聞いてください」と題したプロジェクトを開始した。これは朝のホームルームを使って、毎日一人が「私の話を聞いてください」という言葉から初めて、自身が今、興味関心を抱いている社会の事象を仲間に説明し、語りかけ、その中で自分の思い・考えを述べると同時に最後に皆に問いを発して終わるといったものである。素材としては新聞記事・ネット・雑誌等を自由に選択し、紹介した素材は週の終わりに一枚のプリントにして配布し、改めて各自がじっくり読み込むというシンプルな試みである。

「一年間一緒に学ぶ仲間たちと、一緒に何かを探求し続けるプロジェクトってどう？」と筆者

が語り始めると、生徒達の中から猛烈な拍手が起こった。それを受け「私の話を聞いてください」プロジェクトの構想を話し始めると「おもしろそう〜」「やりた〜い」という声があがったのである。そこで、筆者は「では、今日は私からやらさせていただきます」といい、「私の話を聞いてください。今日、私が皆さんに紹介したいのは、今朝のこの新聞の記事です。震災でお母さんを亡くした一人の女の子のお話です……」と語っていったのだ。4月第1日目、始業式当日であったが、生徒達はまさに傾聴姿勢で熱心に耳を傾け、「皆さんは、この女の子の話を聞いてどんなことを思いましたか？」と投げかけると、とたんにあちこちから、「私も昨日テレビで見たけど……」「私も……」としばし周辺との小さな対話が繰り広げられた後、手が拳がる、「は〜い、どんな話題でも、私が興味あるものならとりあげていいですか？」「せっかくなら、みんなで一緒に考えられるのが良いよね」「でも、意外な話題を誰かがもってきたら、おおって、新たなその人発見っていうのもあっておもしろいんじゃない？」とそこでも活発な対話が繰り広げられた。皆が一つの話目を共有し、一緒に考えることに意味があるのだから、話題のセレクトは全て語り手に任せて良いのではないかとこのところで語り合いは、落ち着くこととなった。「知的冒険」プロジェクトに対する生徒達の共感反応が想像以上に高かったこと、これが一年間このプロジェクトをドライブさせていった一番の要因であったかもしれない。

全員が順番に語る「私の話を聞いてください」プロジェクトには、「傾聴」のほかにもう一つの狙いがあった。それは仲間同士が尊重しあう場を創出することであった。「対話」の中ではともすると、声の大きい人・経験が豊かな人・知的レベルの高い人等の発言に集団の流れが左右されることがあるものだ。しかし、多様な視点を活かす「場」こそが「知的冒険」においては重要であると筆者は考えているからである。今日、仲間たちに語りかける生徒を、その素材提供の専門家として皆が尊重し、様々なことを彼女に問いかけていく。ある日、語りを終えた生徒が、日直日誌に次のように書いていた。「私はよくかむし、うまく、みんなの前で話せないのも、いつもつつい声小さくなってしまいがちです。それで、今朝、自分とよく似ている英国王にひかれて映画「英国王のスピーチ」を話したら、みんなが超熱心に聞いてくれ、後でも、いろいろ私にたずねてくれて、ものすごくうれしかった。今まで一度も話したことがなかった人と、今日一気に話せたような気がしました。ものすごくうれしかった」。

異質な考えや視点が排除されることのないよう心がけること。違和感を抱いたら、それを素直に表に出せるよう、内容よりも語り手の表情やしぐさというノンバーバルなところにまで注意しながら耳を傾けること。そして他者を尊重しあい、本音で語りあう場をつくることこそが、知的冒険には不可欠という思いを更に強く抱くこととなった。評論授業の中で、そして毎日の「私の話を聞いてください」の中で、生徒達は一生懸命他者の発言を聴くことで、自己と他者の差異に気づき、自己の考えを深めたり、広げたりする学びの楽しさに魅了されていった。そんなある日、生徒達から「先生、今度みんなで読書会したいです。一つの小説を真ん中において、みんなで語り合いたいです」という要請が出てきたのである。そのような声に答え、7月15日期末考査答案返却日の午後、34名の有志による、吉本ばなな「ムーンライト・シャドウ」をめぐる「七夕読書会」が開催されたのである。

2-2 七夕読書会「ムーンライト・シャドウ」の実践

生徒達と筆者と一緒に選定した読書会の作品は、よしもとばなな作「ムーンライト・シャドウ」であった。高校二年次の授業で、よしもとばなな作「バブーシュカ」を読んで以来、彼女のファンが増えていたこと、3・11以来、死をめぐる語りに対してどうしても敏感にならざるをえない

状況の中、喪失感をいかに乗り越えていくかをたえず考え続けている生徒が多いこと等あったの選択であった。読書会提案の中心メンバーたちと、読書会でどんなことをやってみたいかを話しあったところ、「次の3点を中心に、後は、そのときのみんなの語りをもとに、いつものようにみんなで一緒に創っていこう」という。

- ・一人で考えるよりも、みんなで考えるほうが楽しい。
- ・一人で考えるよりも、みんなで考えるほうがステキなアイデアが生まれる。
- ・一人で考えるよりも、みんなで考えるほうが、大きくジャンプできる。

読書会のデザインとしては、次の点が決まった。

- ①みんなで感想を交換しあう。
- ②話し合いたいテーマを焦点化してディスカッションを行なう。
- ③ホット・シーティングを行なう。(登場人物の心情を体験する)
- ④キャッチ・コピーを作る。
- ⑤読書会の感想を交換する。

7月15日(金)期末考査答案返却日の午後13時から15時、場所は図書館レファレンス・ルームに、34名のメンバーが集まってきた。

第Ⅰ部は作品の感想を語りあい、参加者全員で思いを共有していくというセッションであった。ディスカッションのテーマとなった大きな5つの感想は後述するとして、それ以外に出された感想の一部を紹介しよう。

- ・等のことを泣かないで思い出せるようになると、それはいいことかもしれないけど、等が遠くなるっていうシーンがあって。何か、悲しいとかそういう風に思う気持ちをなくしちゃたら、つまり、相手が死んだことを悲しいと思えなくなって、フツウに思い出せる自分にすごい傷ついたって。分かる気がします、悲しいって思うことを忘れると、その人が本当に死んでしまう、忘れることの罪悪感みたいなもの、悲しみを抱いて生きるって難しい。
- ・生きてる等との最後の別れのシーンっていうか、それが完璧だった、っていう、パーフェクトなっていうところが、非常に……、等が亡くなって、最後の別れがあるから、余計に非常に、印象的だった
- ・その後せめてちゃんとお別れが言いたかったっていうのが……せめてお別れを言いたかった、突然の、えーっと、村上春樹をやったときも、サドンデスという言葉が出て、いきなり死んじゃうことの辛さを考えたけど、せめてお別れが言いたいっていう思いが七夕現象起こしたのになって…なんか泣きそう……。
- ・この本当に一番最後に、手を振ってくれてありがとうって、なんかありがとうを2回言って、あえて最後に、等との別れで、さようならって言わないで、あえて、ありがとうっていうのが。なんか……さようならっていうのは、なんか本当に決別っていう感じだけど、ありがとうは、その、等がいた、っていう存在とか思い出とかも全部、受容っていうか、受け入れて、の、ありがとうっていう、なんだなあって涙が出そうです。
- ・21ページの、愛するものの死んだ場所は未来永劫時間が止まるってところがものすごく印象的で、最近読んだノルウェーの森では、友達が死んじゃって、その友だちだけは時間が止まるけど、自分達は大学生になって、未来が進んでいくっていうのがあって、なんかそれで、そっか、死んだ人は時間が止まっちゃって、自分達の中では、残るけど、でも、自分達が変わらないと、歩んでいかないといけないから、なんか、そういうのがすごい悲しいなあと。
- ・25ページの、……このまま壊れてしまいたいと思う、っていうこの、壊れてしまいたいって



う、ダメージみたいな、壊れてしまいたいぐらいの、ダメージを受けているのに、最後は、私は行きますみたいな、ちゃんと、自分にけじめ、みたいなものをつけていて、その成長みたいなのがすごいなって……。

七夕読書会をみんなで一緒に創っていこうと集まってきた34名の生徒達は、一人目の生徒が自らの視点で独自の感想を語ると、それに「響く」かのように自身の思いを語り始める。それは、相手の話に耳を傾ける中で、ふっと浮かんできた思いであったり、誰かの語りが刺激となって、自身の経験とムーンライト・シャドウがそのときに結びついたものであったりした。34人のメンバーは真摯に語りあい、談笑し、深い気づきを得て新しい何かを生み出そうとする予感に満ちた語りを繰り返していった。

セッションの進行役である筆者は、メンバーがリラックスして意見が言えるような雰囲気作りに注意を払うと同時に、小さな声や言いよどみに対しても、皆がじっくり待てる・聴ける姿勢となるようなロール・モデルを提示することを心がけた。他者の感想に共感し、考え方・発想の差異に気づくというコミュニケーションが行なわれ始めたところで、いよいよ第Ⅱ部、皆で「問い」を中心に「対話」を深め、答えを探しにいこうとする「知的冒険」のハイライトのセッションに入っていくこととなった。そこで、生徒達に皆の感想を聞きながら、これについてぜひ話したいなと思う「問い」を考えていくことを提案した。すると、多くの生徒の感想の中に何度も登場し、皆の興味関心の対象となっていた以下の五点について、皆で話したいということになった。

- ①柊はなぜセーラー服を着続けるのか？
- ②うららとは何者か？
- ③さつきとは一体どんな少女か？
- ④水筒のこの小説における意味は？
- ⑤さつき・うらら・柊・等・ゆみこ名前の意味するものは？

生徒たちの具体的な声とその後の感想を、以下に列挙したい。

- ①柊はなぜセーラー服を着続けるのか？
 - ・セーラー服着ていると、自分が、柊が由美子ちゃんと一体化している、その、そばにいてくれ

- る、包まれている。そんな感じがあるからかな。
- 何かちょっと、他の作品で、自分が読んだので、何か、悲しいとかそういう風に思う気持ちをなくしちゃたら、何か、自分がその、相手が死んだことを悲しいと思えなくなっちゃったっていうのにすごい傷ついたっていう、感想でも誰かいったように、だから、由美子のこと忘れないために、ずっと着ておく
 - 私も死んだおじいちゃんの大切にしていたものはずっとそばにおいておくとかもあるし……。
 - でも、逆に、セーラー服って、普通着ないから、由美子とかじゃなくて、セーラー服を着ている自分として考えることによって、なんか、由美子うんぬんとかじゃなくて、変わったっていうか、いつもと違う自分っていうことで、由美子が死んだことについてあれこれ深く考えなくてすむ、みたいな。
 - ああ、そういう意味の。つまり、柊が柊であるということは、哀しみをずっと抱えることになるけれども、柊がセーラー服を着た途端に、一步別人格になっちゃう。だからもう、悲しいことも考えなくても、なるべくいいようなものとしての一つの作法というかなんかこう、別次元にいくためのセーラー服。
 - 戦闘服って、セーラー服って戦闘服、ああ、戦闘服、つまり、私の中が壊れそうになっていう表現があったよね。だからじっとしていたら哀しみのあまり、ばらばらになりそうな私を守る、色々なものから守る、一つの戦闘服としてのセーラー服の働きなんじゃないかなあ。

以上、柊のセーラー服の意味をめぐる対話を受けての感想を紹介したい。

- 「セーラー服って戦闘服この自身の壊れそうな思いを支え保持していくための手段と G ちゃん言った時、死を受容することのできない哀しみという方向で収束しつつあった空気が、ぱーんと新たな方向にひろがりみんなが『おおーっ』と叫びました」

②うららとは何者か？

- 私は普通に存在している、人だと思う。一回、何か、変な形で、恋人を亡くした子みたいなことをドーナツショップで言っていて、それはそれで、なんか、恋人が死んじゃった人が、この人はたまたまちょっと不思議な人だったのかなと思う。
- めいが今言ってた、変な形で死に分かれた恋人と最後の別れが出来るかもしれないっていう所で、相手が死んだとも、自分が死んだとも言っていないから、でもなんか、さっきももこが言ってたんだけど、うららが出てくるのはいつもなんか、どっかぼんやりしてるみたいなものが多いから、どうなんだろうなど。
- あ、うららは悪魔だと思った、さつきをあの世につれていく……だってあまりになんでも知ってるし、へんなときにでてくるし、うーん、でも悪魔じゃないか。七夕現象だし……さつきとセットでしかでてこないのも謎だよなあ。
- あー、つまり、あの世とこの世を橋渡しするような、メッセンジャー。
- 私は、本当は最初はこの人はうららは、生きてたけど、自分が死んじゃって、最愛の人との別れが辛くて、自分と同じ、状況は反対だけど気持ちの人がいたから、これは、最後、あわせてあげたいなと思ったら、自分は幽霊だった、みたいな……。
- ああ、なんかよくあるよね。ドラマとかでもね。うらら自体はだから、実在に今本当にここに、こうやってここにいるような人とも、思えないみたいな。
- みんなも言ってるけど、うららって一体……、でもね、何かよく、すごいショックになったら、

性格が2個にわかれちゃうっていうのがあるじゃないですか。だから、そんな感じで。ひょっとしたら自分と全く正反対のじゃないけど、そういう、自分が……おかしくなっちゃいそうな自分をどうにかして律しようっていう、もう一人の自分との交流じゃないけど、の可能性もあるかなあみたいなの。

- ・私も、うらははさつきの分身だって思います。なんていうか、最初にあったときは、少し年上に見えたけど、よくわからないみたいな、雰囲気が出てて、あと、水筒売り場であったときは、同じくらいの年に思えた。っていうのがちょっと気になって。あと、やっぱり、主人公の気持ちの中から出てきたっていうか、立ち直りたいっていう気持ちがあって、それが現れたみたいな。

うららをめぐる対話の後の感想を紹介しよう。

- ・「うらははさつきの分身、喪失の哀しみから立ち上がり、前進していこうとするさつきのなかにうまれたもう一人の私、Mちゃん発言は私の中にあった思いをはっきりと言葉にしてくれました」

③さつきとは一体どんな少女か？

- ・キャラが薄いよね。典型的な一般人だよな。
- ・ああ、一般人。何の特徴もない、普通の女の子って感じ。
- ・だからこそ、みたいな。投影しやすい。自分とかぶせやすい。
- ・かぶせやすいから、入っていきやすい。
- ・大切な人が死んで、その人のこと以外考えられない。わかるよね～。
- ・思ってることだけしか書いてないけど、普通は結構、自分が普通にしなきゃと思って、全然そんな悲しいふりもしないで、なるべく忙しくしてるよね……フツウにするって、ホントはエネルギーいるよね。

さつきをめぐる対話における「フツウ」についての感想を紹介しよう。

- ・「さつきはフツウの少女、大好きな恋人を失くし死ぬほど哀しみにくれる、このフツウさが重要、フツウであるから、共感を覚えることが可能、でも、フツウにふるまうことってエネルギーがいるんだってこと、みんなが同じことを考えていてびっくりした」

④水筒のこの小説における意味は？

- ・なんかさ、熱いものを飲んでものを飲んで、なんか、朝早かったっていうのだけすごい覚えてる。朝普通、熱いまま、お茶を入れて、走りに出て飲んでるから、ああ、熱いんだなって。
- ・ああ、あのね、今の私も同感。つまりこの人の話って、七夕現象一つにしても、どう考えてもちょっとオカルトめいてるよね？七夕現象って。だけど、これ日常生活のことによって思わせるためには、やっぱり水筒、重要かも。つまり走ってって、あったかくて、そこで飲んで、あったかい熱い、これはリアル。
- ・で、思ったのが、オカルト現象、七夕現象の後に、どこに入ってたかっていったら、多分ミスドかどっかわかりませんが、朝ドーナツ屋っていうのがあるよね。っていうのはすごい日常。だから、今日常生活の中で起こっている。
- ・さっきほら、さつきって普通の子だから共感できる、これが、どう考えても、西洋の霧の中の

アンダルシア地方とかいって、アンダルシア地方の話だと、ちょっとごめん、うちら日本人やし、みたいになるけど、日常の話という意味では、水筒は重要かも。

- ・うん、現実の中で起こりうるんだよ、こういうお話って。なんか今、話聞きながら、私、日常的であるということが、この話ですごい重要なあって、だから、日常に、リアルにもどしてくれる、水筒ってめっちゃ大切かも。

水筒をめぐる対話の中心となった「日常」についての感想を紹介しよう。

- ・「ジョギングという哀しみを忘れるための儀式の中で、熱いお茶はさつきを日常次元に帰してくれるもの、Ｙちゃんの発言にびっくりしました。水筒は深いものだった、はじめて気づきました」

⑤ さつき・うらら・柊・等・ゆみこ名前の意味するものは？

- ・平仮名だよ。両方とも。さつき、うらら。そっか、で、五月でうらら、春ってことになるよ、やっぱり、さつきとうららっていうのは、関係あるか。
- ・うららは春でしょう。四月。まあ、春ってくくりなんじゃん。
- ・で、さつき、五月じゃん。なんか、時の流れありそう。
- ・あ、時の流れがある、四月から五月に。
- ・すごいなー！
- ・ちょっと前の自分が一歩進んでいく、っていう意味もあるかも。
- ・うららが消えて、さつきが。
- ・なんかさ、名前関係で男の子が漢字じゃん、で、女の子は、ゆみこもさつきもうららも全部ひらがなじゃん、で、何かあるのかなと思った。
- ・ああ、さつき柊はクリスマスのあれもあるなっていうこと、等は？
- ・でもさ、さつき、うらら、柊、で季節っぽいのに、何で等だけ？
- ・あー等だけ、あ、でもゆみこもだ。
- ・ゆみこもね！等とゆみこは季節感がないという。
- ・あ、死んだから？？死んだから、動かないから、季節がない、みたいな。
- ・ああ、生きてる3人には季節があるっ、うらら、さつき。だから、うららが過ぎて、さつきの季節になって、そして周りめぐり、柊の冬になりっていう、生きてる3人の名前には時の流れがある、ところが、あっちに行ってしまった2人は、等もゆみこも、もう季節がないって。
- ・深いなあ。

登場人物のネーミングについてのディスカッションは、メンバーの思いを大きく揺るものとなり、多くのメンバーがその対話について感想を述べている。

- ・「うららは春、哀しみの冬を過ぎて春を迎える意味、さつきは、「うらら」の春を過ぎ哀しみを乗り越え再生する初夏を、柊はクリスマス「冬」と考えると、生きている三名は、冬を過ぎて、春を向かえ、初夏に至る、まさに、時の流れを表すのに対して、季節の無い世界で生きる二人が「等」「ゆみこ」であることの意味は大きい・・・とみんなの意見を聞きながら鳥肌がたちました」

続いての第Ⅲ部のセッションでは、等・柊・さつきという登場人物になりきった人が椅子に座



り、みんながその人に様々な「問い」をかけるというホットシーティングを用いて登場人物にアプローチしていった。ホット・シーティングに座った人、そして尋ねる人、皆が一生懸命考え、思いを語る姿の一部を紹介しよう。

～等～

S：橋で、さつきと川越しに対面したときに、一番最初に何を思いましたか？

等：うれしかった、でも、会えない現実を知ってるから、ちょっと身を乗り出してでも行きたいけど、でも、そこには行けないのがあるから、心は嬉しいけど、行動がそこまで移せない、うれしくて、哀しくて。

S：さつきには、今後どういう風に生きてもらいたいですか？

等：うーん、自分のことももちろん、覚えててほしいけど、でも、それだと、さつきが哀しいままだから、自分はずっとさつきのことを好きなままだけど、さつきには自分じゃなくて、他の人でも、好きになって、さつきが好きになる人は、きっと自分も好きな人を好きだから。

S：最後に一言だけ、さつきちゃんに、声をかけるとしたら何ていいますか？

等：んー……でもやっぱり、ありがとうございます。自分、死んじゃったけど、今まで、一緒に生活できて、さよならも言わずにいちゃって、でも、さよならって言っちゃうと、もう絶対に会えないっていうのは分かってるから、やっぱり、さよならじゃなくて、今までありがとう。

～柊～

S：やっぱり、今でもテニスのもを見るとゆみこちゃんを思い出しますか？

柊：うーん。やっぱり、何気なくぱっと、町で、ショーウインドウをぱって見ると、ふと思い出すけど、でも、セーラー服がなくなった、あのことがあったから、これから、それがうすれていっても、それが、忘れたっていうよりも、なんか、その、ゆみこが自分の一部になって、いくんだなっていうのを、忘れていて、ああって思うよりも、思い出して、薄れていても、自分の一部になっていってるんだなって思いたい。です。

S：ゆみこが最後、セーラー服を取りにきたときに、どういう風に思っていた？やっぱりまだ自分で着たい、みたいな。

柊：もしかしたら人は信じないかもしれないけど、やっぱりそこに彼女は来て、セーラー服、も

う着ないほうがいいよ、みたいな意味合いで、なんか、もってっちゃったから、彼女が来て、セーラー服を持ってくことで、その、清算してくれたって言うか、これからはちゃんと前を向いて歩いていくんだよ、みたいな意味合いでもってってくれたから、やっぱりよかったのかなって。

～さつき～

S：なんか、柊君は、形見として、セーラー服だったじゃないですか、等の形見って何かあったりしたんですか？

さつき：形見はなかったけど私にとっては等と一緒に過ごした日々が全て形見。

S；うらが、私にたくさんのをくれたって言うけど、うららからもらったものの中で一番大切なものは何ですか？

さつき；今が一番大変で、って言いましたね、かぜをひいたときに。でも、やっぱり、七夕現象が私にとって一番の贈り物だと思います。つまり、願ってれば、いつかは叶う。そしてそれは、色んなチャンスがあって、本当に偶然に偶然が重なったものだけど、強く願ってれば叶うっていう思い、祈る、祈りの気持ちっていうか、私がもらったのは、信じて祈るという気持ちだと思います。

最後の第Ⅳ部のセッションでは、私自身にとって「ムーンライト・シャドウ」とは？という問いを考えるために、キャッチコピーを作る活動を行なった。皆とともに対話を繰り広げる知的冒険に遊ぶ旅から帰り、再び静かに自己内対話を繰り広げる、その中から生まれたキャッチ・コピーのいくつかを紹介したい。

- ・ 祈りの奇跡
- ・ 川の向こうのあの人へ
- ・ 青い川の不思議な出来事
- ・ 鈴が導く青のストーリー
- ・ 喪失～それでも私は生きていきます～
- ・ 私は「さよなら」のために、もう一度彼に会う
- ・ 流れる川を見つめながら、私は生きねばなりません

2-3 「ムーンライト・シャドウ」をめぐる冒険とは？

まず、一人一人が「ムーンライト・シャドウ」を読むことで、自己内対話を繰り広げ、次にそれを仲間に語ることから、ムーンライト・シャドウをめぐる冒険がスタートした。他者の発言に一生懸命耳を傾ける中で、自身の思いとそれが響き合い、また、それに触発されて思いがけない考えが生まれる。そこで多くの仲間が響き・深めあった話題をさらに「問い」という形で中心に置き、皆で対話を繰り広げる。それがどんな展開を見せるかは、その日・その場所で誰が、どんなことを語り始めるかにかかっている。始まるまでは全てが謎の、まさに冒険なのである。

語り合う中で、問いの答えが見つかるか、見つからないか、そしてまたそれが果たしてどのようなものかも、全て霧の彼方である。しかし、七夕読書会プロジェクトの中心メンバーも他の参加者も一様に、自分達が主体となって、一生懸命考えることでしか、何かを手に入れることができない、ということだけは十全に理解していた。ディスカッションの後の、ホット・シーティングは、まさに差異を可視化する体験を重視するものであった。ディスカッションによって、我々はどこかにたどりつけるかもしれないし、なんらかの答えを手に入れることができるかもしれない、あるいはできないかもしれない。しかし、決して絶対的な正解などは存在せず、それぞれが

有する自分なりの思いや考えを認め合うことが重要であることを、ホット・シーティングを通して生徒達は改めて体験してくれたと思われる。

さらに皆で語り合い、考えた後には、自らの思いを振り返るというリフレクティブな視点の確保も重要だと考えた。最初の自己内対話が、他者との語りを通してどう変わったのか、変わらなかったのか、そこを改めて考えると同時に、自身の思いの変容も含め、私にとってのムーンライト・シャドウがいかなるものであったかが、各自で問い直されなければなるまい。かかる考察を、プレイフルなキャッチ・コピー制作という創作活動で仕上げることも、冒険の終わりとしては楽しい活動であったのだ。

そしてとりわけ重要なのは、参加者全員の「語り」が響き合った結果、様々な言葉が交わされ、多くの新たな「知」が生み出されたことに尽きるだろう。幾度でも繰り返すが、それは教師が事前に用意してきた、あらかじめパッケージ化されたものではなく、動的な語りの中から生まれた新たな創造なのだ。

とりわけ、

- ・ 柊はなぜセーラー服を着続けるのか？
- ・ うららとは何者か？
- ・ さつきとは一体どんな少女か？
- ・ 水筒のこの小説における意味は？
- ・ さつき・うらら・柊・等・ゆみこ名前の意味するものは？

これら五つの問いが読書会に参加したメンバー全員の思考にスイッチを入れ、それが連鎖して皆の思考がスパークしていく場に、筆者を含む全員が立ち会ったのである。一人一人が考えていたことよりもさらに思考は深まり、多様となっていったことが、読書会后に得られた以下の感想からもうかがえる。

- ・ 身近に死を経験したことの無い私が、今日はリアルに死を感じ、考えることができました。私一人で考えていたら絶対思いつかないことをみんなが語るの、それにすごい刺激を受けました。体験したことがなくても友達の話を知っていたら自分も体験したかのように、記憶を分けてもらった気がします。
- ・ 最初一人でムーンライト・シャドウを読んだとき、哀しさをうまく整理することができませんでした。でも、今日、みんなと一緒に話し合っているうちに、人はこうやって、哀しみを乗り越えていくのだなと思いました。
- ・ 一人で読んでいたときは、思いもしなかった疑問が、友達の話を知っているうちに浮かんだり、みんなと語り合うなかで、いきなり自分での思いがけない発想がわいてきたりして、不思議な、そしてワクワクする体験でした。
- ・ 亡くなった人にとっては、止まってしまう時間、生きている私達には流れ続ける時間、あたりまえだけど、今まで考えたことのなかったことを、話し合うことで、ものすごくせつない気分になりました。
- ・ あたりまえなことだけど、みんながみんな違う意見や考え、感じ方をもっていることに、驚いたり、感心したり…みんなの意見がきけて面白かったし嬉しかった。いろんな視点からものを見ることが新鮮だと改めて思いました。
- ・ ムーンライトとシャドウ、月の光と影、私はこの題名に最初から興味関心があって、でも、その題名の意味がうまくわからなかったのですが、みんなと話し合う中で、「さつき」と「うら

- ら」が同一人物、哀しみにくれるさつきに対して、もう一度、一步踏み出そうと励ます「さつきのなかのもう一人のさつき」が「うらら」なのではないかという意見がでたとき、正直、鳥肌がたちました。光と影の意味が、みんなと話す中で、じわじわ分かってきて、感動でした。
- ・哀しみをみんなが共有していく中で、人は、少しずつ、元気をもらい、再生していくのかもしれないと思いました。みんなと、問いをみつけて、みんなと考えていく、ステキな時間が終わるのが、正直、さびしかったです。
 - ・人の前で意見を言ったりするのが苦手な私は、読書会で何もいえなかったらどうしようってドキドキしていました。でも始めてみんなの話を聞いていたら、不思議なくらいいっぱい考えが浮かんできました。まだ私は大切な人を亡くしたことはないけれど、人はその哀しみを乗り越えて生きることのできる強さを持っていること、そして、人は誰かと支えあうことで生きることができることを学びました。いろんなことを考えさせてくれたみんなにありがとうございますを言いたいです。

3 さいごに

七夕読書会とは何だったのか？その問いを端緒に、実践を振り返ることによって、その意味を内省し、改めて解釈し、意味づけしなおす過程を叙述した。その中で、七夕読書会が単なるイベントではなく、新たな学びを構築していく一つの「冒険」であったことに気づくことができたのである。毎日の授業の中で、ともすると能率的・効率的に知識を伝達することばかりを工夫し、コミュニケーションにおいても論理的にわかりやすく他者に伝えることを求めがちな日常的な「学びのスタイル」を一旦捨て、むしろそれを異化するような試み、「どこにたどり着くか分からない」「何が生まれるか、いや、何も生まれないかもしれない」という「学びの冒険」が教えてくれたものは、恐らくは変化への可能性であった。「対話」を通して他者とつながり、それによって自身の思いに気づき、自らの思いや考えが深まる、その結果として初めて、新たな知がめぐり始めるのである。このような知の生成現場に立ち会える喜びを体験するためには、自身の学びのスタイルを変容させる必要を、筆者は強く感じ始めている。新たな学びの冒険への旅は、一人で成し遂げることはあまりに困難であり、それゆえに、多くの人々とつながることによって進んでいきたいと強く思っている。